

書 評

上田 敏・大川弥生 編

リハビリテーション医学大辞典

大橋 正洋 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

上田敏, 大川弥生の師弟コンビによる待望の一巻が発刊された。リハビリテーション医学大辞典である。リハビリテーション医学の分野で、用語に関心を持つ者は、本書が準備されているというのを聞いてから実際に手にするまで随分待つことになった。上田先生によると、本書の準備から完成までに10年を要したとのことである。早速手にしてみると、A5版サイズだから取り扱うにはハンディだが、852ページ、厚さが4cmもあって、ずしりと重い。辞典のケースにはリハビリテーション医学大辞典と表記されているが、本体ビニールレザの表紙には金文字でCyclopaedia of Rehabilitation Medicineとある。上田先生の書かれた序文の中から、辞典の編纂方針や出版までの過程を紹介する。見出し語は、狭い意味でのリハビリテーション医学専門用語だけでなく、臨床および基礎医学用語が幅広く含まれ、さらに社会医学、看護学、歯科医学、心理学、統計学、社会福祉、法制などの用語、および教育、職業、社会リハビリテーションの分野の関連の深い用語が収録されている。この辞典編纂に際して使用した参考文献は、内外の医学辞典、各学会用語集、白書類、リハビリテーション医学関連書籍、医学教科書、医学雑誌など200点以上に及ぶ。このため両先生は、膨大な資料から大規模な用語の選択をするために、平日の夜や休日を出版社の一室で資料の山に埋もれて過ごすことを繰り返されたという。日頃多忙なお2人が、これだけの仕事をこなされたわけだから、そのような超人的な努力が必要であったことは十分理解できる。

辞典は、日本語に解説が加えられている部分と欧和編の2部で構成されており、ページ数で3対1の

比率になっている。主体は前者であるが、欧和編の部分も単なる索引ではなく、英略語を取り上げたり、短い解説を加えるなどの工夫がされている。

さてリハビリテーションのように多職種が関与する分野では、同じ概念の事柄に違う用語を用いたり、逆に異なる事象を同じ用語で表現するなどの混乱が起こりやすい。辞典や用語集を編纂する場合、規範に則って厳密に用語を規定するか、それとも使用されている現実を容認するか、永遠に解決できないジレンマがある。この辞典では、主として現実主義の立場をとり、必要に応じて規範主義の立場からのコメントを加えられたとのことである。これだけ大部の辞典であると、通常は多くの専門家の共同作業で行われる。しかしこの辞典は、内容の一貫性を重視し、用語の解説はすべてお2人が担当されている。「リハビリテーション」あるいは「日常生活行為」などは、400字程度の他の用語より多めの解説が加えられている。これらのリハビリテーション医学独自の用語については、借り物ではなく、日頃上田先生が主張されている内容が示されている。例えばADLの用語について、「日常生活動作」であるか「日常生活活動」であるべきかの議論はあったが、本辞典では「日常生活行為」として統一されている。本辞典の発刊を機会に、リハビリテーション医学の分野において、新たに用語への関心と呼ぶことが考えられる。両先生は、長年の過酷な作業から解放されて、一息ついておられることであろうが、常に新しい用語が加わる医学の分野で、この辞典の改訂をどのように行うべきか、計画だけでも立てておかれることが必要かも知れない。

(A5 頁880 8,252円+税 1997 医歯薬出版刊)